

翻刻『源氏拔書』(中)

—— 落標く若菜下 ——

田 坂 憲 二

みをつくしのまきに

とりかへしつへき心ちこそすれ、いかに、との給につけて、
けにおなしくは御みちかくつかまつらはうき事もなくさみ
なんかしと見奉る

源氏

かねてよりへたてぬなかとならはねと(四九ウ)「わ
かれはおしきものにそありける

したひやしなましとのたまへは、うちわらひて

宮内卿幸相女

うちつけのわかれをおしむかことにておもはぬかたに
したひやはせぬ

たゝこの事のみ御心にかゝれるはあさからぬにこそは、御
ふみにもをろかにもてなし思ふましきことをかへすく
い
ましめ給へり

源氏

いつしかや袖うちかけんをとめこかよをへてなつるい

はのをひさき

とくまいりなんといそきくるしかりければ、御返事と思事
すこしつゝけて

明石上

ひとりしてなつるはそてのほとなきに(五〇オ)「お
ほふはかりのかけをしそまつ

たゝならすおほしつゝけて、我はわれとうちそむきなかめ
給て、あはれなりしよのありさまかなと、ひとりことのや
うにうちなきて

紫上

おもふとちなひくかたとはあらずともわれてけふりに
さきたちなまし

なにとか、あなこゝろうや

源氏

たれによりよをうみやまにゆきめぐりたえぬなみたに
うきしつむ身そ

おもほしやれる事ともありかたくめてたきさまにてまめ

くしき御とふらひともあり(五〇ウ)

源氏

うみまつやときそともなきかけにゐてなにのあやめも
いかゝわくらん

めのとの事もいかに、なとこまかにとはせ給へるを、かた
しけなくては事もおもひなくさめける、御返には

明石上

かすならぬみしまかくれになくたつをけふもいかにと
とふ人そなき

のとやかにものし給ふけはひいとめやすし、くひなのいと
ちかくなきたるを

花散里

くひなたにおとろかさすはいかにしてあれたるやとの
月をいれまし

いとなつかしういひけち給へるも、とりくすてかたき
よかな(五一オ)かゝるこそなかくみもくるしけれと

おもほす

源氏

をしなへてたゝくくひなにおとろかはうはのそらなる
月もこそいれ

あからさまにたちいて給へるところにさふらひてきこえい
てたり

惟光

すみよしのまつこそものはかなしけれ神代の事をおも
ひいつれば

けにとおほしいてゝ

源氏

あらかりしなみのまよひにすみよしのかみをはかけて
わすれやはする

御車とゝむる所にてたてまつれり、おかしとおほして御た

たうかみに(五一ウ)

源氏

身をつくしこふるしるしにこゝまでもめぐりあひける
えにはふかしな

露

明石上

はかりなれといとあはれにかたしけなくてうちなきぬ
かすならてなにはのこともかひなきになと身をつくし
おもひそめけん

いりえのたつもこゑおしまぬほとのはれなるおりからな
れはにや、ひとめもえつゝむましくあひみまほしくおほさ
る

源氏

露けさのむかしににたるたひころもたみののしまのな
にはかくれす

関屋のまきに(五二オ)

女もひとしれすいにしへの事わすれねは、とりかへして物
あはれなり

ゆくくとくとせきとめかたきなみたをやたえぬしみつと
人はみるらん

御せうそくあり、いまはおほしわすれぬへき事をこゝろな
かくもおはするかなと思ふたり、ひと日はちきりしられし

を、さはおほししりけめや

源氏

わくらはにゆきあふみちをたのみしもなをかひなしやしほならぬうみ

いまはましていとはつかしくよろつうゐくしきこちすれと、めつらしきにやえしのはれさりけん（五二ウ）

空蟬

あふさかのせきやいかなるせきなれはしけきなけきのなかをわけゝん

よもきふのまき

わか御くしのおちたまへりけるをとりあつめてかつらにし給へりけるか、九尺よはかりにていともきよなるをはこにいれて、むかしのくのえかうのいとかうはしきひとつほをくしてたまふ

末摘花

たゆましきすちをたのみしたまかつらおもひのほかにかけはなれぬる

かくおほえぬみちにいさなはれ侍りてはるかなるほとにまかりあくかるゝことゝて（五三オ）

侍従

たまかつらたえてもやましゆくみちのたひけのかみもかけてちかはん

もりぬれたるはしつかたをしのこはせこゝかしこおましひきつくろはせなとしたまひて

末摘花

なき人をこふるたものひまなきにあらたるのきのし

つくさへそふ

よもきのつゆけさになんはへる、みちすこしかきはらはせてなんいらせたまふへき、ときこゆれば、おほしわつらひて

源氏

たつねてもわれこそとはめみちもなくふかきよもきのもとのこゝろを（五三ウ）

ひきうへしならねとまつのかたくなりけるとし月のほともあはれに、ゆめのやうなる御身のありさまおほしつゝけるる

源氏

ふちなみのうちすきかたくみえつるはまつこそやとのしるしなりけれ

としへたまひつらん春秋のくらしかたさなとまたれにかはうれへたまはんとうらなくおほゆるも、かつはあやしく、などの給へは

としへてもまつしるしなきわかやとをはなのたよりにすきぬはかりか

ああはせ

女別当御覽せさす、たゝ御くしのはこのかたつかたをみたまふに（五四オ）つきせすこまかになまめきてめつらしきさま也、さしくしのはこのこゝろはに

朱雀

わかれ路にそへしをくしをかことにてはるけきなかと

神やいさめし

御おさな心ちもたゝいまの事とおほゆるに、こみやす所の御事などかきつらねあはれにおほされて、たゝかく

前斎宮 秋好 わかるとてはるかにいひしひとこゑもかへりて物はい

まそかなしき

とりかへしかなしうおほし出らる、いまゝてみせたまはさ
りけるうらみをそきこえ給ふ

紫上 ひとりゐてなけきしよりはあまのすむ（五四ウ）「か
たをかくてそみるへかりける

おほつかなさはなくさみなまし物をとの給ふ、いとあはれ
とおもほして

源氏 うきめみしそのおりよりもけふは又過にしかたにかへ
る涙か

おもしろくにきはゝしく、内わたりよりうちはしめちかき
世のありさまをかきたるはおかしう見所まさるに、左右た
ゆまず、平内侍か

いせの海のふかき心をたとらすてふりにしあとなみ
やけつへき

よのつねのあたことをひきつくるひかされるにをされて、
なり（五五オ）「ひらか名をやくたすへき、とあらそひか
ねたり、右のすけ

大江典侍 雲の上におもひのほれるこゝろにはちひろのそこもは

るかにそみる

兵衛のおほひ君の心たかさはけにすてかたけれど、在五中
将の名をはなをえくたさし、とのたまはせて、宮

薄雲 見るめこそうらふれぬらめとしへにしいせをのあまの
名をやしつめむ

御消息はたゝこと葉にて、院の殿上にもさふらふ左近中将
を御つかひにてあり、かの大極殿の御こしよせたる所のか
うくしきに

朱雀 身こそかくしめのほかなれそのかみの（五五ウ）こゝ
ろのうちをわすれしもせず

とのみあり、きこえたまはさらんもいとかたしけなければ、
くるしうもおほしなからむかしの御かんさしのはしをいさゝ
かおりて

秋好 しめのうちはむかしにあらぬこゝちして神代の事もい
まそこひしき

松風のまきに有り

ゆゝしきまでかく人にたかへる身をいまくしく思ながら、
かた時見たてまつらてはいかてかすくさんとすらん、とつゝ
みあへす

明石上女 ゆくさきをはるかにいのるわかれちにたえぬはおいの
なみたなりけり（五六オ）

いともゆゝしやとてをしのかひかくす、あま君

もろ共にみやこはいてきこのたひやひとり野中のみちにまとはん

とてなき給さまいとことはり也、こゝらちきりかはしてつもりぬるとし月のほとをおもへは、かううきたる事をたのみてすてし世にかへるも、おもへはかなしや、御方

いきて又あひみんことをいつとてかかきりもしらぬ世をはたのまん

入道は心すみはつましくあくかれなめたり、こゝらしをへていまさらにかへるもなを思つきせず、あま君はなきたまふ（五六ウ）

^{尼君}かのきしにこゝろよりにしあまふねのそむしかたにこきかへるかな

御方

いくかへり行かふ秋をすくしつゝうきゝにのりてわれかへらん

松風はしたなくひゝきあひたり、あま君ものかなしけにてよりふしたまへるにおきあかりて

^{尼公}身をかへてひとりかへれるやまさとにきゝしににたる松風そふく

御方

ふるさとに見し世のともをこひわひてさへつることを

たれかわく覧（五七オ）

むかし物かたりにみこのすみ給けるありさまなとかたらせ給に、つくろはれたる水のをとなひかことかましうきこゆ^{尼公}すみなれし人はかへりてたとれともしみつそやとのあるしかはなる

わさとはなくていひけつま、みやひかによしときゝたまふ

^{源氏}いさらゐはやくのことともわすれしをもとのあるしやおもかはりせる

物あはれなるにえしのひ給はてかきならし給ふ、またしらへもかはらす、ひきかへしそのおりいまの心ちしたまふ

^源ちきりしにかはらぬことのしらへにて（五七ウ）たえぬこゝろのほとはしりきや

女

かはらしとちきりしことをたのみにてまつひゝきにねをそへしかな

こゝにかうとまらせ給ひにけるよしきこしめして御せうそこあるなりけり、御つかひは蔵人の弁なりけり

^{冷泉院}月のすむ河のをちなるさとなれはかつらのかけはのとけかるらん

おほゐにわさとならぬまうけの物やといひつかはしたり、とりあへたるにしたかひてまいらせたり、きぬひつ二かけ

にてあるを御つかひの弁はとくかへりまいれは、女のしやうそくかつけたまふ（五八才）

^源久かたのひかりにちかき名のみしてあさゆふきりもはれぬ山さと

かのあはちしまをおほしいて、みつねか所からかとおほめきけん事などのたまひいてたるに、物あはれなるゑいなきとも有へし

^源めぐりきて手にとるはかりさやけきやあはちのしまのあはとみし月

頭中將

うき雲にしはしまかひし月かけのすみはつるよそのとけかるへき

右大弁、すこしおとなひて故院の御時にもむつまじうつかうまつりなれし人なりけり（五八才）

^{右大弁}雲のうへのすみかをすて、夜半の月いつれのたに、かけかくしけん

うすくものまき

おつるなみたをかきはらひて、かやうならん日ましていかにおほつかなからむ、とらうたけにうちなきて

^{明石上}ゆきふかきみやまのみちははれすともなをふみかよへ

あとたえすして

とのたまへは、めのともいみしううちなきて

^{乳母}ゆきまなきよしの、やまをたつねてもこゝろのかよふあとたえめやは（五九才）

は、きみみつからいたきていてたまへり、かたことゝのゑはいとうつくしうて、袖をとらへてのりたまへとひくもいみしうおほえて

^{明石上}すゑとをきふたはのまつにひきわかれいつかこたかきかけをみるへき

えもいひやすいみしくなけは、さりやあなくるしとおほして

^{源氏}おひそめしねもふかけれはたけくまのまつにこまつのちよをならへん

わたとのゝくちにまちかけて中將の君してきこえたまふ^{紫上}ふねとむるをちかた人のなくはこそあすかへりこんせなとまち見め（五九才）

いたくなれきこゆれはにほひやかにほゝゑみて

^{源氏}ゆきて見てあすもさねこむなかゝにをちかた人はこゝろをくとも

やまきはのこすゑあらはに見えてくものうすくわたれるかにひいろなるを、つねはなにとも御めとまらぬ事なれと物あはれにおほさる

^{源氏}いりひさすみねにたなひくうすくもは物思ふそてにい

ろそまかへる

むつまじうおもふたまへられぬへければ、^(ママ)しとけなけにの
たまひけつともいとらうたけなる御けはひに、えしのひたま
はて(六〇オ)」

源氏

きみもさはあはれをかはせ人しれす我身にしむるあき
のゆふ風

いとこしけき中よりかゝりひのかけとものやりみつのほた
るに見えまかふもおかし、かゝるすまゐにしほしまさらま
しかはめつらかにおほえなまし、とのたまふ

明石上

いさりせしかけわすられぬかゝりひはみのうきふねや
したひきにけん

おもひこそまかへられ侍れときこゆれは

源氏

あさからぬしたのおもひをしらねはやなをかゝりひの
かけはさはける(六〇ウ)」

あさかほの巻に

ありしよはみなゆめにみなしていまなんさめてはかなきよ
にやと思給へさためかたく侍に、らうなとはしつかにやさ
ためきこえさすへう侍らん、ときこえいたし給へり、けに
こそさためかたき世なれとはかなき事につけてもおほしつゝ
けゝる

源氏

ひとしれす神のゆるしをまちしまにこゝらつれなき世

をすくすかな

むかしよりもいますこしなまめかしきけさへそひ給ひにけ
り、さるはいといたうすくし給へと御くらゐのほとはあは^らい

さめり

権斎院

なへて世のあはれはかりをとふからに(六一オ)」ち
かひしことゝ神やいさめん

けさやかなりし御もてなしにひとわろき心ちし侍て、うし
ろてもいとゝいかゝ御覧しけんとむねいたく、されと

源氏

見しおりの露わすられぬあさかほの花のさかりはすき
やしぬらん

人々も御すゝりとりまかなひてきこゆれは

権斎院

あきはてゝきりのまかきにむすほゝれあるかなきかに
うつるあさかほ

かりそめのやとりをえおもひすてす、きくさの色にもこゝ
ろをうつすよ、とおほししらる、くちすさひに(六一ウ)」

源氏

いつのまによもきか門とむすほゝれ雪ふるさとゝあれ
しかきねそ

さためなきよなりとおほすに、物あはれなる御けしきを、
心ときめきにおもひてわかやく

源内侍

としふれとこのちきりこそわすられねおやのおやとか
いひしひとこと

ときこゆれは、うとましくて

源氏
身をかへてのちもまちみよこの世にておやをわするゝ
ためしありやと

かせのけしきはけしくてまことにいと心ほそくおほゆれは
(六二才)「さまよきほとにをしのこひたまひて

源氏
つれなさをむかしにこりぬこゝろこそ人のつらきにそ
へてつられ

心つからの、とのたまひすさふるを、けにかたはらいたし
と、人々れいのきこゆ

権
あらためてなにかはみえん人のうへにかゝるときゝし
こゝろはかりを

むかしいまの御物かたりに夜ふけゆく、月いよくすみて
しつかにおもしろし、女きみ

紫上
こほりとちいしまの水はゆきなやみ空すむ月のかけそ
なかるゝ(六二ウ)「

いさゝかわくる御心もとりかへしつへし、をしのちなき
たるに

源氏
かきつめてむかしこひしきゆきもよにあはれをそふる
をしのうきねか

いまもいみしくぬらしそへ給ふ、女君いかなることにかと
おほすに、うちもみしろかてふしたまへり

源氏
とけてねぬねさめさひしき冬のよにむすほゝれつるゆ
めのみしかさ

あみたほとけを心にかけてねんし奉り給、おなしはちすに
ところそは

源氏
なき人をしたふこゝろにまかせてもかけみぬ水のせに
やまとはん(六三才)「

をとめ

おほいとにより、御みそきの日いかにとやかにおほさる
らん、ととふらひきこえたまへり、こそそのけふまては

源氏
かけきやはかは瀬のなみもたちかはり君かみそきのふ
ちのやつれを

むらさきのかみのたてふみすくよかにふちのはなにつけ給
へり、おりのあはれなれは御かへし

権
ふちよりもきはきのふとおもふまにけふはみそきの
せにかはるよを

(ママ)
ひとりことをき給けるもはつかしうてあいなく御かほひき
いれ給(六三ウ)「へと、あはれはしらぬにしもあらぬそ

にくきや、めのとたちもちかふふしてうちみしろくもくる
しければ、かたみにをともせず

夕霧
さよなかにともよひわたるかりかねにうたてふきそふ
おきのうは風

よの中いとうらめしければあはれもすこしきむるこゝちし
てめさまし、かれきゝたまへ

夕霧

くれなるのなみたにふかき袖の色をあさみとりとやい
ひしほるへき

との給ふて

雲井鴈

いろ／＼に身のうきほとんしらるゝはいかにそめける
なかのころもそ（六四オ）

みちのほと人やりならす心ほそくおもひつゝくるに、そら
のけしきもいたくもりてまたくらかりけり

夕霧

霜こほりうたてむすへるあけくれのそらかきくらしふ
るなみたかな

たゝならてきぬのすそをすこしひきならしたるを、なに心
もなくあやしとおもふに

夕霧

あめにますとよ岡ひめのみや人もわかこゝろさすしめ
をわするな

むかし御目とゝまり給ひしをとめのすかたまつおほしいつ、
たつの日のくれつかたつかはす、御ふみのうちおもひやる
へし（六四ウ）

源

をとめ子も神さひぬらんあまつ袖ふるき世の友よはひ
へぬれは

としのつもりをうちおほしけるまゝに、あはれをえしのひ
給はぬはかりおかしう思たえぬもはかなし、くらけれと御
返

五節君

太二女

かけていへはけふのことゝそおもほゆるひかりの霜の
(ママ)

翻刻『源氏拔書』(中)

そてにとけしも

としのほとよりはされてやありけんおかしと見る、みとり
のうすやうのこのまじきかさねなるに、てはまたわかれ
とおいさきみえていとうつくし

夕霧

ひかけにもしるかりけめやをとめこか（六五オ）あ
まのは袖にかけしこゝろは

そのよの事思つゝけらるゝあはれなり、ひま侍ほとおとゝ
院に御かはらけまいりたまふ

源

うくひすのさへつるこゑはむかしにてむつれし花のか
けそかはれる

院のうへ

朱雀

こゝのへをかすみへたつるかきねにもはるをつけくる
うくひすのこゑ

そちのみこときこえしいまは兵部卿にて、いまのうへに御
かはらけまいりたまふて

兵部卿宮

いにしへをふきつたへたる笛竹に（六五ウ）さへつ
るとりのねさへかはらぬ

あさやかにそうしなし給へるようお願いにめてたし、とら
せ給て

冷泉院

鶯のむかしをこふるさへつりは木つたふ花の色やあせ
たる

わらはのおかしきをなんえおほしすてさりける、さるところ

ろにさふらひなれたれば、もてなしありさまほかのにはに
すこのましようおかし、御せうそこには

秋好
こゝろから春まつそのはわかやとのもみちを風のつて
にたにみよ

わかき人々御つかひもてはやすきまともおかし、御かへり
はこの「六六才」御はこのふたにこけしきいはなどの心
はへして五えうのゑたに

紫上
かせにちる紅葉はかけしはるのいろをいつはの松につ
けてこそみめ

玉かつら

かへるなみもうらやましく心ほそきに、ふなことのあら
くしきこゑにて、うらかなしくもとをきにけるかな、
とうたふをきくまゝに、ふたりさしむかひてなきけり

小二
ふな人もたれをこふとかおほしまのうらかなしけにこ
姉御許敷
ゑのきこゆる

玉かつら乳母
こしかたもゆくゑもしらぬおきに出て「六六ウ」あ
兵部卿君殿
はれいつくときみをこふらん

この月はきのはてなりなとゐなかなひたる事をいひのかる、
おりていくきはに哥よまゝほしかりければ、やゝおもひめ
くらしで

大夫監
君にもしこゝろたかはゝまつらなるかゝみのかみをか

けてちかはん

此わかほかまつりたりとなん思給ふる、とうちゑみたる
もよつかすうゐくしや、あれにもあらはかへしすへくも
おほえす、むすめともによますれと、まつはまして物もお
ほえすとてゐたれば、いとひさしきにわつらひて、思ける
まゝに

乳母
としをへていのるこゝろのたかひなは「六七才」かゝ

みの神をつらしとやみん

たゝまつらの宮のおまへのなきさとこのあねをもとのわか
るゝをなん、かへりみせられてかなしかりける

兵部卿君
うきしまをこきはなれてもゆくかたやいつことまりと

しらすもあるかな

玉かつら
ゆくさきも見えぬなみちにふなてして風にまかする身
こそうきたれ

ちゑさきふねのとふやうにくるなといふものあり、かい
そくのひたふるならんよりもかのをにしき人のをひくるに
やとおもふにせんかたなし「六七ウ」

うきことにむねのみさはくひゝきにはひゝきのなたも
なのみなりけり

むかし物かたりしくらす、まうてつとふ人のありさまとも
みくたさるゝはう成けり、まへよりゆくみつをはつせ川と
いふ成けり、右近

右近

ふたもとのすきのこたちをたつねすはふるかはのへに
君を見ましや

うれしきせにも、ときこゆ

玉かつら

はつせ川はやくの事はしらねともけふのあふせに身さ
へなかれぬ

まつふみのけしきをゆかしうおほすなりけり、ものまめや
かに（六八才）あるへかしうすこしかきたまひてはしに、
かくきこゆるを

源氏

しらすともたつねてしらんみしま江におふるみくりの
すちはたえしを

はつかしとおほしたり、からのかみのいとかうはしきとう
てゝかゝせたてまつる

玉かつら

かすならぬみくりやなにのすちなれはうきにしもかく
ねをとゝめけん

いとむしんにしなしてしわさそかし、とてわらひ給に、お
もてあかみてをはするいとわかうおかしけなり、すゝりひ
きよせたまふて手ならひに（六八ウ）

源氏

こひわたる身はそれなれと玉かつらいかなるすちをた
つねきつらん

御ふみはいとかうはしきみちのくかみのすこしとしへあつ
きかきはみたるに、いてやたまふたるはなか／＼にこそ
きてみれはうらみられけりからころもかへしやりてん

末摘

そてをぬらして

はつねの巻

けさこの人々のたはふれかはしつる、いとうらやましくみ
えつるを、うへにはわれみせ奉らん、とて、みたれたるこ
とゝもすこしうちませつゝいはひきこえたまふ（六九才）
うすこほりとけぬるいけのかゝみにはよにたくひなき
かけそならへる

源氏

けにめてたき御あはひともなり

紫上

くもりなきいけのかゝみによろつよをすむへきかけそ
しるくみえける

きたのおとゝよりわざとかましくしあつめたるひけことも
わりこなとたてまつれ給へり、えならぬ五えうの枝にうつ
れる鶯も思ふこゝろあらむかし

明石上

とし月を松にひかれてふる人にけふうくひすのはつね
きかせよ（六九ウ）

いとうつくしけにて、あけくれみ奉る人たにあかすおもひ
きこゆる御ありさまを、今迄おほつかなきとし月のへたゝ
りけるもつみえかましく心くるしとおほす

ひきわかれとしはふれともうくひすのすたちし松のね
をわすれめや

こ松の御かへりをめつらしとみけるまゝに、あはれなるふ

る事ともかきませて

めつらしや花のねくらにこつたひてたにのふるすをと
へるうくひす

こうはいのさき出たるにほひなと見はやす人もなき（七〇
オ）を見わたり給て

源氏 ふるさとの春のこすゑにたつねきてよのつねならぬ花
をみるかな

こてう

をしのなみのあやにもんをましへたるなど、ものゝゑやう
にもかきとらまほしきに、まことにをのゝえもくたいつへ
うおもひつゝ日をくらす

風ふけはなみの花さへ色みえてこや名にたてるやまふ
きのさき

春のいけや井てのかはせにかよふらん（七〇ウ）き
しの山ふきそこもにほへり

かめのうへの山もたつねし船のうちにおいせぬなをは
こゝにのこさん

春の日のうらゝにさしてゆく船はさほのしつくも花そ
ちりける

御かはらけのついでにいみしうもてなやみ給ふて、おもふ
心侍らすはまかりにけなまし、いとたへかたしや、とすま

ひ給ふ

蜆 むらさきのゆへにこゝろをしめたればふちに身なけん
なやはおしけき

とておとゝの君におなしかさしをまいりたまふ、いといた
うほ（七一オ）ほゑみたまひて

源氏 ふちに身をなけつへしやとこの春は花のあたりをたち
さらに見よ

御せうそ殿の中将の君してきこえたまへり

紫上 花そのゝこてふをさへや下草に秋まつむしはうとくみ
るらん

中将の君にはふちのほそなかそへて女のさうそくかつけ給、
御かへり、きのふはねになきぬへくこそは

秋好 こてふにもさそはれなまし心ありてやへ山ふきをへた
てさりせは（七一ウ）

からののはなたのかみのいとなつかしうしみふかうにほへる
を、いとほそくちいさくむすひたるあり、これはいかなれ
はかくむすほゝれたるにか、とてひきあげ給へり、ていと
おかしうて

柏木 おもふとも君はしらしなわきかへり岩もる水に色しみ
えねは

くれ竹のいとわかやかにおひたちてうちなひくさまのなつ
かしきに、たちとまりたまふて

源氏

ませのうちにねふかくうへし竹のこのをのかよゝにや
おひわかるへき

おもへはうらめしかへいことそかし、とみすひきあけて聞
え(七二才)「たまへは、ゐさりいてゝ

玉かつら

いまさらにいかならんよかわか竹のおひはしめけんね
をはたつねん

はこのふたなる御くた物のなかにたちはなの有をまさくり
て

源氏

たちはなのかほりし袖によそふれはかはれるみともお
もほえぬかな

御手をとらへ給へれば、女かやうにもならひ給はさりつる
を、いとうたておほゆれと、おほとかなるさまにてものし
給ふ

玉かつら

袖のかをよそふるからにたちはなのみさへはかなくな
りもこそすれ(七二ウ)」

しろきかみのうはへはおいらかにすく／＼しきにいとめて
たうかい給へり、たくひなかりし御けしきこそつらきしも
わすれかたう、いかに人見奉りけん

源氏

うちとけてねもみぬ物をわか草のことありかほにむす
はゝるらん

ほたる

ほのかなれとそひやかにふし給へるやうたいのおかしかり
つるをあかすおほして、けにあのこと御心にしみにけり

ほたる

なくこゑもきこえぬむしのおもひたに人のけつにはき
ゆるものかは(七三才)」

おもひしり給ぬやときこえ給ふ、かやうの御返しを思まは
さんもねちけたれば、ときはかりをそ

玉かつら

こゑはせて身をのみこかすほたるこそいふよりまさる
おもひなるらめ

しろきうすやうにて御てはいとよしありてかきなし給へり、
みるほとこそおかしかりけれ、まなひいつれはことなるこ
となしや

ほたる

けふさへやひく人もなきみかくれにおふるあやめのね
のみなかれん

(ママ)

これかれもなきときこゆれば、御心にもいかゝおほしけん
玉
あらはれていとゝあさくもみゆるかな(七三ウ)」あ

やめもわかすなけれけるねの

人つてにのみきゝ給けるに、けふめつらしかりつることは
かりをそ、このまちのおほえきらく／＼とおほしたる

花散里

そのこまもすさめぬ草となにたてるみきはのあやめけ
ふやひきつる

とおほとかにきこえ給ふ、なとはかりの事にもあらねとあ
(ママ)

はれとおほしたり

源氏 には鳥にかけをならふるわかこまはいつかあやめにひ

きわかるへき

又なき心ちすれ、とてよりゐ給へるさまいとあされたり

(七四才)

源氏

おもひあまりむかしの跡を尋ぬれはおやにそむけるこ

そたくひなき

御くしをかきやりつついみしくうらみ給へはかろうして

玉

ふるきあとを尋ぬれとけになかりけりこのよにかゝる

おやのこゝろは

とこなつ

物のついてにかたりいて給へりしもたゝいまのことゝそお
ほゆる、とてすこしのたまひ出たるにもいとあはれなり

源氏

なてしこのとこなつかしき色を見はもとのかきねを人

やたつねん(七四ウ)

この事のわつらはしさにこそまゆこもりも心くるしうおも
ひきこゆれ、との給ふ、君うちなきて

玉かつら

山かつのかきほにおひしなてしこのもとのねさしをた

れかたつねん

みなせ川にを、とて又はしにかくそ

近江君

くさわかみひたちのうみのいかゝさきいかてあひみん

たこの浦なみ(*「ら」の上から「み」と重ね書き)

いとおしからん、とてたゝ御ふみめきてかく、ちかきしる
しなきおほつかなさほうらめしくて

弘徽殿女御 中納言君作

ひたちなるするかの海のすまのうらに(七五才)な

みたちいてよはこさきの松

かゝり火

夏の月なきほとは庭のひかりなき、いと物むつましくおほ

つかなしや、とのたまふ

源氏

かゝり火にたちそふこひのけふりこそよにはたえせぬ

ほのほなりけれ

いつ迄とかやふすふるならてもくるしきしたもえ成けり、
ときこえ給ふ、女君、あやしのありさまやとおほすに

玉かつら

ゆくゑなきそらにけちてよかゝり火のたよりにたくふ

けふりとならは(七五ウ)

野分

はしのかたについゐ給て風のさはきはかりをとふらひ給て、
つれなくたちかへり給ふも心やましけなり

明石上

おほかたに萩のは過るかせのをともうき身ひとつしむ

心ちして

おまへに人もいてこすいとこまやかにうちさゝめきかたら

ひきこえ給ふに、いかゝあらんまめたちてそたち給ふ、女
君

ふきみたる風のけしきにをみなへししほれしぬへき心
ちこそすれ

猶見はてまほしけれと、ちかゝりけりとみえたてまつらし
(七六才)とおもひてたちさりぬ、御かへし

源氏 下露になひかましかはをみなへしあらき風にはしほれ
さらまし

筆のさきうち見つゝこまやかにかきやすらひ給へるさまい
とよし、されとあやしくさたまりて、にくき御くちつきこ
そのしたまへ

夕霧 風さはきむらくもまよふゆふへにもわするゝまなく忘
られぬ君

みゆき

蔵人の左衛門のせうを御つかひにてきしひとえたたて(七
六ウ)まつらせ給ふ、おほせことにはなにとかやさやう
ののりの事まねふにわつらはしくなん

冷泉院 雪ふかきをしほの山にたつきしのふるきあとをもけふ
はたつねよ

太政大臣のかゝる野ゝ行幸につかうまつり給へるためしな
とや有けん、おとゝ御つかひをかしこまりもてなさせ給

源氏 をしほ山みゆきつもれる松原にけふはかりなるあとや
なからん

しろきしきしにいうちとけたる御ふみ、こまかにけしき
はみてもあらぬかをかしきを見給ふて、あいなの事やと
(七七才)わらひ給ふ物から、よくもをしはからせ給ふ
物かなとおほす、御返に、きのふは

玉かつら うちきらしあさくもりせしみ雪にはさやかにそらのけ
しきやはみし

いてそこにしもそめてきこえ給はん、などの給ふて、又御
返

源氏 あかねさすひかりは空にくもらぬをなとてみ雪にめを
きらしけん

あはれにうけたまはりあきらめたるすちをかけ聞えさらん
もいかゝ、御けしきにしたかひてなん

夕霧祖母 ふた方にいひもてゆけは玉くしけ(七七ウ)わか身
はなれぬかけこ成けり

おもひいつれは人におとさんはいと心くるしき人なりとき
こえたまふ、御こうちきのたもとにれいのおなしすちの哥
有けり

末つむ花 わか身こそうらみられけりからころも君かたもとな
れすとおもへは

あやしう人の思よるましき御心はへこそさらても有ぬへけ

れ、とにくさまにかきたまふて

源氏

からころも又からころもからころもかへすくもから

ころもなる

御かはらけまいる程に、かきりなきかしこまりをはよ（七八才）にためしなきことゝきこえさせながら、いま迄かくしのひこめさせたまふけるうらみもいかゝそへ侍らさん、と聞え給ふ

致仕

うらめしやおきつ玉もをかつくまで磯かくれけるあま

のこゝろよ

とてなをつゝみもあへすしはたれ給、姫君はいとはつかしき御さまものさしつとひ、つゝましさにえきこえ給はねは、殿

源氏

よるへなみかゝるなきさにうちよせてあまもたつねぬ

もくつとそみし

藤はかま

とみにもゆるさても給へれば、うつたへにおもひもよらて（七八ウ）とり給ふ御袖をひきうこかしたり

夕きり

おなしのゝ露にやつるゝ藤はかまあはれはかけよかこ

とはかりも

道のはてなるとかや、いと心つきなくうたて成ぬれば、みしらぬさまにやをらひきいりて

玉かつら

たつぬるにはるけき野への露ならはうすむらさきやか

ことならまし

とし比のむもれいたさをもあきらめ侍らぬは、いと中くなる事おほくなん、とたゝすくよかにきこえなし給ふに、まはゆくてよろつをしこめたり（七九才）

柏木

いもせ山ふかき道をはたとらすてをたえのはしにふみ

まとひける

とうらむるも人やりならす

玉かつら

まとひけるみちをはしらていもせ山たとくしくそた

れもふみ見し

大将とのゝには、なをたのみこしもすきゆく空のけしきこそこゝろつくしに

鬚黒

かすならはいとひもせましな月にいのちをかくるほ

とそはかなき

兵部卿の宮は、いふかひなき世はきこえんかたなきを（七

九ウ）

螢兵部卿宮

あさ日さすひかりを見ても玉さゝの葉わけの霜をけた

すもあらなむ

したしくまいりなしたまふ君なれば、をのつからいとよくものゝあないもきゝていみしくそ思ひける、いとおほくうらみつゝけて

左衛門督

わすれなんと思ふも物のかなしきをいかさまにしてい

かさまにせん

人々もみな、おほしたえぬへかめるこそさうくしけれ、
なといふ、宮の御返をそ、いかうとおほすらんたいさう
かにて

（ママ）
玉簪

ころもて日影にむすふあふひたにあさをく霜ををの
れやはけつ（八〇オ）

まきはしら

いとおかしけに、おもやせ給へるさまのみまほしうらうた
き事そひたまへるにつけても、よそに見はなつもありな
る心のすさひそかし、とくちおし

源氏

おりたちてくみは見ねともわたりかは人のせとはたち
きらさりしを

おもひのほかなりや、とてはなうちかみたまふけはひなつ
かしうあはれなり、女はかをかくして

みつせ川わたらぬさきにいかてなをなみたのみほにあ
はときえなん（八〇ウ）

ゆきのけしきもふりいてかたくやすらひ侍りしに、身さへ
ひえてなん、御心をはさる物にて人いかにとりなし侍けん、
ときすくにかきたまへり

髻黒

ころさへそらにみたれしゆきもよにひとりさえする

かたしきの袖

御ゆとのなといたくつくろひたまふ、もくのきみ御たきも
のなとしつゝきこゆ

ひとりゐてこかるゝむねのくるしきにおもひあまれる
ほのほとそみし

かやうの人に物をいひけん、などのみそおほえたまひける、
な（八一オ）さけなき事よ

髻黒

うきことをおもひさはけはさまくにくふるけふりそ
いとちそふ

ひめ君ひはたいろのかみのかさねたゝいさゝかにかきて、
はしらのひはれたるはさまに、かうかいのさきしてをしい
れたまふ

いまはとてやとかれぬともなれきつるまきのはしらは
われをわするな

えもかきやらてなきたまふ、はゝきみはいてやとて

なれきとはおもひいつともなにゝよりたちとまるへき

まきのはしらそ（八一ウ）

おまへなる人々もさまくになさなくて、さしもおもはぬ
きくさのもとさへこひしからんことゝそとめてはなすゝり
あへり、もくのきみはたとのゝ御かたの人にてとゝまる、
中将のおもと

あさけれといしまのみつはすみはてゝやとるきみや

かけはなるへき

おもひかけさりし事也、かくてわかれ奉らん事よといへは、
もく

ともかくもいはまのみつのむすほゝれかけとゝむへく
おもほえぬよを

大將はつかさの御曹司にそゐたまへりける、それよりとて
とりいれたれば、しふゝにそみ給（八二オ）

^兵みやま木にはねうちかはしゐるとりの又なくねたきは
るにもあるかな

よろこひなともおもひしりたまふらんとおもふ事あるを、
きゝもいれ給はぬさまにのみあるはかゝる御くせなり、と
のたまはせて

^{御門}なとてかくはひあひかたきむらさきをこゝろにふかく
おもひそめけん

みやつかへのらうもなくてことしかゝいたまへる心にやあ
らん

いかならんいろともしらぬむらさきを心してこそ人は
そめけれ

大將もいともものむつかしうたちそひさはきたまひてえおは
し（八二ウ）「ましはなれす、かくいときひしきちかきま
もりこそむつかしけれ、とにくませたまふ

^{御門}こゝのへにかすみへたてはむめのはなたゝかはかりも

にほひこしとや

みをつみて心くるしうなんいかてかきこゆへき、とおほし
なやむもいとかたしけなしとみたてまつる

かはかりはかせにもつてよはなのえにたちならふへき
にほひなくとも

右近かもとにしのひてつかはすもかつはおもはんことをお
ほすに、なに事もえつゝけたまはて、たゝおもはせたる事
共そ有ける（八三オ）

^源かきたれてのとけきころのはるさめにふるさと人をい
かにしのふや

右近はほのけしきみけり、いかなりけん事ならんとそいま
に心えかたくおもひける、御返、きこゆるもはつかしけれ
とおほつかなくやは、とて

なかめするのきのしつくも袖ぬれてうたかた人をしの
はさらめや

くれ竹のませにわさとなくさきかゝりたるにほひいとおも
しろし、いろにころもを、などのたまひて

^源おもはずに井てのなかみちへたつともいはてそこふる
やまふきのはな（八三ウ）

たいめんのかたからんをくちおしう思給る、などおやめき
かき給て

^源おなしすにかへりしかひのみえぬかななる人かて

ににきるらん

おり／＼おもひはなたすうらみことはし給、とつふやくも
にくしときゝ給、御返事にはえきこえしとかきにくゝおほ
したれは、まつきこえんとかはるもかたはらいたしや

玉かつら

すかくれてかすにもあらぬかりのこをいつかたにかは

(ママ)

とりかへすへき

このよにめなぬまめ人をしも、これそな、ゝとめてゝさゝ
めきさはくこゑいとくるしと思ふに、こゑいとはなやかに
て(八四オ)

近江君

おきつふねよるへなみちにたゝよはゝさをさしやらん

とまりをしへよ

たなゝしをふねこきかへりおなし人をや、あなわろやとい
ふを、いとあやしうこの御かたにはかくよういなき事きこ
えぬものとおもひまはすに、このきく人なりけりとおか
しくて

夕霧

よるへなみ風のさはかすふな人のおもはぬかたにいそ

つたひせす

梅かえ

むめをえりておなしくひきむすひたるいとさゝもなよひ
かななまめかしうそしたまへる、えんなる物のさまかなと
て(八四ウ) 御めとゝめ給へるに

権

花の香はちりにしえたにとまらねとうつらん袖にあさ
くしまめや

なに事のかくろへあるにかふかくかくし給ふ、とうらみて
いとゆかしとおほしたり、なに事かは侍らん、くま／＼し
くおほしたるこそくるしけれ、とて御すゝりついでに

源

花のえにいとゝ心をしむるかな人のとかめん香をはつゝ

めと

宮もおとゝもさしいらへし給てこと／＼しからぬ物からお
かしき夜の御あそひなり、御かはらけまいるに、宮(八五
オ)

鶯のこゑにやいとゝあくかれん心しめつる花のあたり
に

千代もへぬへし、ときこえたまへは

源

色も香もうつるはかりにこの春は華さく宿をかれすも
あらなん

頭中将に給へは、とりて宰相中将にさす

うくひすのねくらのえたもなひくまてなをふきとをせ

夜はのふえ竹

宰相中将

心ありて風のよくめる花の木に(八五ウ) とりあへ
ぬまてふきやよるへき

なさけなくと、みなうちわらひ給、弁少将

かすみたに月と花とをへたてすはねくらのとりもほころひなまし

まことに明かたになりてそ宮かへり給、御をくり物に、み
つからの御れうの御なをしの御よそひ一くたり、手ふれ給
はぬたき物二つほそへて、御車にたてまつらせ給ふ、宮、
花のかをえならぬ袖にうつしもてことあやまりといも
やとかめん

とあれば、いとくつしたりやとわらひ給、御車かくる程に
をひて（八六オ）

^源めつらしと故郷人もまちそみんはなのにしきをきてか
へる君

いかにおほしつらなとよろつに思給へるほとに御文あり、
さすかにそ見給ふ、こまやかにて

^{夕霧}つれなさはうき世のつねになりゆくをわすれぬ人や人
にことなる

とあり、けしきはかりもかすめぬつれなさよ、とおもひつゝ
けたまふはうけれと

^{雲井鴈}かきりとてわすれかたきをわするゝもこやよになひく
心なるらん

藤のうら葉

ひとひの花のかけのたいめんあかすおほえ侍しを、御いと

まあらはたちとり給なんや、とあり、御文には

^{致仕}我やとの藤の色こきたそかれにたつねやはこぬ春のな

こりを

まちつけ給へるも心ときめきせられて、かしこまり聞えた
まふ

^{夕霧}なか／＼におりやまとはん藤のはなたそかれ時のたと
／＼しくは

藤のうら葉のとうちすつし給へる御けしきを給はりて、頭
中将花の色こくことにふさなかきをおりてまらうとの御さ
かつ（八七オ）きにくはふ、とりてもてなやむに、おとゝ
^{致仕}むらさきにかことはかけん藤のはなまつよりすきてう
れたけれとも

宰相さか月をもちなからけしきはかりはいしたてまつりた
まふさま、いとよしあり

^{夕霧}いくかへり露けき春をすくしきて花のひもとくおりに
あふらん

頭中将にたまへは

^{柏木}たをやめの袖にまかへる藤のはな見る人からやいろも
まさらん（八七ウ）

かはくちのそこそさしいらへまほしかりつれ、とのたまへ
は、をんなはいときゝくるしとおほして

^{雲井鴈}あさき名をいひなかしける川くちはいかゝもらしゝ関

のあらかき

あさましとのたまふさまいとこめきたり、すこしうちわらひて

夕霧

もりにけるくきたのせきを川くちのあさきにのみはお

ほせさらなん

つきせさりつる御けしきになかくいとゝおもひしらるゝ

身のほとかな、たへぬこゝろに又きえぬへきも

夕霧

とかむなよしのひにしほるてもたゆみ（八八才）け

ふあらはるゝ袖のしつくを

宰相の中將いてたちの所にさへとふらひ給へり、うちとけ

すあはれをかはし給ふ御なかなれは、かくやんことなきか

たにさたまり給ひぬるをたゝならすうちおもひけり

夕霧

なにとかやけふのかさしにかつみつゝおほめくまでも

なりにけるかな

いかゝおもひけんいと物さはかしく車にのるほとなれと

藤内侍

かさしてもかつたとらるゝ草のなはかつらをおりし人

やしるらん

きくのいとおもしろくうつろひたるをたまはせて（八八才）

夕霧

あさみとりわかはのきくを露にてもこきむらさきのい

ろとかけきや

はつかしういとおしき物からうつくしう見たてまつる

大夫乳母

二葉よりなたゝるそのゝきくなれはあさきいろわく露

もなかりき

ふる人とものかてちらすさうし／＼にさふらひけるなと
まうのほりあつまりていとうれしく思ひあへり、おとこ君

夕霧

なれこそは岩もるあるしみし人のゆくゑはしるや宿の

まし水

女君

なき人のかけたにみえすつれなくて（八九才）心

やれるいさら井の水

ありつる御てならひとものちりたるを御覧しつけてうちし

はたれ給、この水の心たつねまほしけれとおきなほことい

みして、とのたまふ

致仕

そのかみの老木はむへもくちぬらんうへし小松もこけ

おひにけり

おとこ君の御さい相のめのとつらかりし御心もわすれねは、

したりかほに

夕霧乳母

いつれをもかけとそたのむ二葉よりねさしかはせる松

のすゑ／＼（八九才）

あるしの院きくをおらせ給て、せいかいはのおりおほしい

つ

いろまさるまかきのきくもおり／＼に袖うちかけし秋

をこふらし

我も人にはすくれ給へる身ながら、なをこのきはゝこよな

かりけるほとおほししるる、しくれおりしりかほなり

致仕

むらさきの雲にまかへるきくのはなにこりなきよのほ
しかとそみる

うたのほうしのかはらぬこゑも、すさく院はいとめつらし
くあはれにきこしめす

朱雀院

秋をへて時雨ふりぬる里人も（九〇オ）かゝるもみ
ちのおりをこそみね

うらめしけにそおほしたるや、みかと

よのつねのもみちとや見るいにしへのためしにひける
庭のけしきを

わかな上

（ママ）

宮の権の佐院の殿上人にもさふらふを御使にて、ひめ宮の
御かたにまいらすへくのたまはせつれと、かゝることそ中
に有ける

秋好

さしなからむかしをいまにつたふれは玉のをくしそ神

さひにける

（ママ）

けにおもたかしきかんさしなれば、御かへりもむかしのあ
はれをはさしをきて（九〇ウ）

朱雀

さしつきにみる物にもかよろつよをつけのをくしも神
さふるまで

かんの君もいとよくねひまさりものくしきけさへそひて、

みるかひあるさまし給へり

玉かつら

わか葉さす野へのご松をひきつれてもとのいはねをい
のるけふかな

とせめておとなひきこえ給、ちんのおしきよつして御わか
なさまはかりまいれり、御かはらけとり給て

源氏

ご松はらすゑのよはひにひかれてやのへのわかなも年
をつむへき（九一オ）

はつかしうさへおほえ給てつらつえをつきてよりふし給へ
れば、女君御すゝりひきよせて

紫上

めにちかくうつれはかはるよの中をゆくすゑとをくた
のみけるかな

ふる事なとかきませ給ふをとりて見給て、はかなき事なれ
とけにとことはりにて

源氏

いのちこそたゆともたえめさためなきよのつねならぬ
中のちきりを

御ふみたてまつれ給ふ、ことにはつかしけなき御さまなれ
と御ふてなとひきつくるひてしろきかみに（九一ウ）

なかみちをへたつるほとはなけれどもこゝろみたるゝ
けさのあは雪

かたそはひろけ給へるをしりめに見をこせてそひふし給へ
り

女三

はかなくてうはの空にそきえぬへき風にたゝよふ春の

あは雪

つみなくおほしゆるしてうしろみ給へ、たつねたまふへき
ゆへもやあらんとそ

朱雀

そむきにしこの世に残るころこそいる山みちのほた
しなりけれ

御かへりはいかゝなときこえにくゝおほしたれと、こと
くしく(九二オ)「おもしろかるへきおりの事ならねは
たゝ心をのへて

紫上

そむくよのうしろめたくはさりかたきほたしをしゐて
かけなはなれそ

むかしにかはりておとなくしくは聞えたまふ物から、こ
れをかくてやとひきうこかしたまふ

源氏

とし月をなかにへたてゝあふさかのさもせきかたくお
つるなみたか

女

臘月

なみたのみせきとめかたきし水にて行あふみちははや
くたえにき

人めしてかのさきかゝりたる花一えたおらせ給へり(九二
ウ)

源

しつみしもわすれぬものをこりすまに身もなけつへき
やとのふちなみ

女君もいまさらにいとつゝましくさまくにおもひみたれ

たまへるに、花のかけはなをなつかしくて

臘月夜

身をなけんふちもまことのふちならてかけしやさらに
こりすまのなみ

手などのいとわさとも上手とみえてらうくしくうつくし
けにかきたまへり

紫上

身にちかく秋やきぬらんみるまゝにあをはの山もうつ
ろひにけり(九三オ)

とある所にめとゝめ給て

源

水鳥のあをはは色もかはらぬを萩のしたこそけしきこ
となれ

まみのあたりうちしくれてひそみゐたり、あなかたはらい
たとめくはすれときゝもいれす

明石尼君

おいのなみかひある浦に立いてゝしほたるゝあまを誰
かとかめん

むかしの世にもかやうなるふる人はつみゆるされてなん侍
けりときこゆ、御すゝりなるかみに

中宮

しほたるゝあまをなみちのしるへにて(九三ウ)「た
つねも見はやまのとまやを

御かたもえしのひ給はてうちなき給ひぬ

明石上

世をすてゝあかしのうらにすむ人もころのやみはは
るけしもせし

水草きよき山の末にてつとめ侍らんとてなんまかりいりぬ

る

明石入道

ひかりいてんあかつきちかく成にけりいまそみしよの
ゆめかたりする

いとくおしけなるおりくあなるをや、さるはよにをし
なへたらぬ人の御おほえを有かたきわさ也や、といとおし
かる

柏木

いかなれは花に木つたふうくひすの（九四オ）さく
らをわきてねくらとはせぬ

いてあなあちきなの物あつかひやさればよ、とおもふ

夕霧

み山木にねくらさたむるはこ鳥もいかてか花のいろに
あくへき

あやなくけふはなめくらし侍る、などかきて

柏木

よそにみておらぬなけきはしけれとも名残こひしき花
の夕かけ

一日はつれなしかほをなん、めさましうとゆるしきこえさ
りしを見すもあらぬやいかに、あなかけくし、とはやり
かにはしりかきて

小侍従

いまさらに色にないてそ山さくら（九四ウ）をよは
ぬえたに心かけきと

わかな下

いといたくなかめてはしちかくよりふし給へるに、きてね

うくといとらうたけになければ、かきなてゝ、うたてもすゝ

む哉とはゝゑまる

柏木

恋わふる人のかたみとてならせはなれよ何とてなくね
なるらん

そのよの事うちみたれかたり給ふへき人もなければ、ちゝ
のおとゝをそ恋しく思聞給ける、いりたまひて二のくるま
にしのひて

源

たれか又こゝろをしりて住よしの神代をへたる松にこ
とゝふ（九五オ）

よをそむき給ひし人も恋しくさまくゝに物かなしきを、か
つはゆゝしとこといみして

明石尼君

すみの江をいけるかひあるなきさとはとしふるあまも
けふやしるらん

をそくはひんなからんとたゝうち思けるまゝなりけり

明石上

むかしこそまつ忘れねすみよしの神のしるしをみる
につけても

ましてかく都の外のあるきはまたならひたまはねは、めつ
らしくおかしくおほさる

紫上

すみの江の松に夜ふかくをく霜は（九五ウ）神のか
けたるゆふかつらかも

たかむらの朝臣のひらの山さへといひける雪のあしたをお
ほしやれば、祭の心うけ給ふしるしにやといよくたのも

しくなん、女御の君

神人のてにとりもたるさかき葉にゆふかけそふるふか
き夜の霜

中つかさのきみ

はふりこかゆふうちまかひをく霜はけにいちしるき神
のしるしか

今おほしあはする事も侍なんとてのとならずたち出る

(九六才) 明くれ、秋の空よりもこころつくしなり

^{柏木} おきて行空もしられぬあけくれにいつくの露のかゝる
袖なり

とひきいてゝうれへきこゆれは、いてなんとするにすこし
なくさめ給て

^{女三} あけくれの空にうき身はきえなゝんゆめなりけりとみ
てもやむへく

いとつれ／＼に心ほそくなかめ給へるに、わらはへのも
たるあふひを見給て

^{柏木} くやしくそつみをかしけるあふひくさ神のゆるせるか
さしならぬに(九六ウ) 一

おなしくは今一きはをよはさりけるすくせよと猶おほゆ

^{柏木} もろかつらおち葉をなにゝひろひけん名はむつましき
かさしなれとも

いさゝかにてもしんすへきとの給へは、ほろ／＼といたく

なきて

^{邪氣} 我身こそあらぬさまなれそれなから空おほれする君は
きみなり

我身さへうらみとおほゆるおり／＼のありしはや、となみ
たをうけての給へは、みつからあはれにおほして

^{紫上} きえとまる程やはふへき玉さかにはちすの露のかゝる
はかりを

との給ふ(九七才) 一

^源 ちきりをかんの世ならてもはちす葉に玉ある露のこゝ
ろへたつな

月まちてともいふなる物を、といとわかやかなるさまして
の給ふはにくからすかし、そのまにもとやおほすと、心く
るしけにおほしてたちとまり給ふ

^{女三} 夕露に袖ぬらせとやひくらしのなくをきく／＼おきて
行らん

かたなりなる御心にまかせていひ出給へるもらうたければ、
つゐゝて、あなくるしやとうちなき給ふ

^源 まつ里もいかゝきくらんかた／＼に(九七ウ) 一こゝ
ろさはかすひくらしのこゑ

御心うこきてまつとふらひきこえ給ふ、いまなんとたにに
ほはし給はさりけるつらさをあさからすきこえ給ふ

^源 あまの世をよそにきかめやすまのうらにもしほたれし

もたれならなくに

つねなき世とは身ひとつにのみしり侍にしを、をくれぬと

の給せたるになん、けに

朧月夜

あま船にいかゝは思ひをくれけんあかしのうらにいさ

りせし君

(以下続稿)